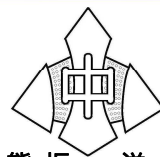


- 心身ともに健康で明朗な生徒
- 自主的に学習する生徒
- 責任を重んじ協調性のある生徒



令和3年 2月18日(木) 発行

【発行責任者】郡山市立小原田中学校長 熊坂 洋

手をたずさえて

10年前の記憶が蘇る 発生予測がつかない自然災害の怖さ

2月13日深夜、福島県沖を震源とするマグニチュード7.3の地震が発生し、福島県や宮城県で最大震度6強の激しい揺れを観測しました。(本市は震度6弱) まさに10年が経過しようとしているあの「3.11」の記憶が蘇る強い揺れでした。まずは、被害に遭われた方々にお見舞い申し上げます。

「10年前を思い出した」 13日深夜に最大震度6強を観測した地震で、東日本大震災の被災地では万が一に備え高台を目指すなどした人もいた。石巻港で20センチ、相馬港で10センチの津波が観測された一方、気象庁からの津波注意報・警報の発表はなかった。沿岸市町村も避難情報を出さなかったが、「あの日」の教訓が人々を突き動かした。

震度6弱を記録した宮城県石巻市。高台の日和山公園には地震発生から間もない13日午後11時半ごろ、市民ら約10人が避難し、携帯電話で連絡を取り合ったり、海の方を不安げに眺めたりした。同市の男子大学生は「友人3人と車で移動中に地震に遭い、高台に逃げてきた。震災時の経験を思い出し、冷静に行動できた」と話した。

同県多賀城市の山王地区公民館には、仙台市宮城野区のNさん(20歳)が駆け込んだ。震災当時は津波で被災した大船渡市の小学4年生。「記憶がよみがえり、テレビを見る前に家を飛び出した。無我夢中で内陸方向に自転車をこぎ、気付いたら公民館に着いた」と振り返った。

このほか、福島県いわき市などのガソリンスタンドには給油目的の車列ができた。震災直後のガソリン不足に苦しんだ経験が影響したとみられる。

震災から間もなく10年というタイミングでの大規模な余震。東北大災害科学国際研究所の今村所長は、「震源が浅ければ、津波はもっと大きくなっていった。地震の揺れは自然が発する最初の『津波警報』。気象庁の情報が出る前に避難準備に取りかかることが大切だ」と指摘する。その上で「避難した人は震災の経験を生かしているが、一般的には風化や防災意識の低下が懸念される。今回の地震を機に、備えについて改めて点検してほしい」と呼びかけた。

～河北新報ネットニュースより～

今回の地震では、県内の建物被害は約2千棟、負傷者は93人(2月16日現在)にのぼります。ライフラインや交通網への影響も出ています。被害を受け休校措置をとったり、今年度の給食実施が不可能になったりした学校もあります。

本校においては、右の写真のとおり、理科室のガラス器具と家庭科準備室の食器類の一部の破損、音楽科のボンゴ太鼓の破損、図書室の本の散乱等がありましたが、大きな被害はありませんでした。ただ、体育館天井からの落下物があり、教育委員会と業者が点検した結果、足場を組んでの天井全体の総点検が必要となり、体育館の使用を中止しています。2月20日(土)に総点検を実施するので、体育館の使用はそれ以降となります。卒業式等も控えているため、業者の方々のご尽力で早期の対応となりました。感謝いたします。体育の授業及び部活動については、他の活動場所で工夫しながらの取り組みとなっています。

自然災害はいつ、どのように起こるかは予測不可能です。ネットニュース内の今村所長の呼びかけのとおり、今回の地震、東日本大震災から10年が経過しようとしている今、改めて日頃の備えについて再確認していく必要があると強く感じます。



理科室と家庭科室の被害状況



落下し破損したボンゴ



本が散乱した図書室

“今、伝えたいこと” 東日本大震災から10年

東日本大震災に関連した1年国語科の授業を紹介した「学校だより No.18」にも掲載しましたが、私がかつて勤務した本宮第二中学校の話です。東日本大震災からもうすぐ10年が経過します。そのタイミングでの今回の地震発生でした。10年前の記憶が蘇り、当時の生徒達が残した作文や資料を読み返してみました。

本来、震災などの災害時における学校の役割はとても大きいものです。自分を取り巻くそれまでの生活環境などが急激に変化することを体験した生徒にとって、学校はそれまでの日常とのつながりを感じさせてくれる大切な場所であり、安心・安全を与えてくれる場所であるところに大きな意味があります。しかし、当時の本宮二中生には、その器となる校舎が無くなってしまったのです。公民館での厳しい間借り生活からのスタートでした。そんな困難な状況下でも、前を向いて進もうとする生徒がたくさんいました。その中から3年女子生徒の作文を紹介します。

私にとってこんな大きな災害を経験することは初めてだ。私があんなに不安だったのだから、私より小さな弟、私をいつも支えてくれる両親も不安だっただろう。けど私は周りの人の気持ちを考えず、自分のことばかりを考えていた。不安、怒り、これからどうになってしまうだろう…。私の心を占領していたのは、思いやりより今の状況に対する不満やわがままだったのだ…。

学校から連絡が来た。私は素直に嬉しかった。外出もろくに出来なくて、友達にもずっと会えなかったの、学校に通えると分かり私の気持ちはだいぶ軽くなった。それも束の間、まだ連絡は終わってなくて、私達が通っていた本宮第二中学校は取り壊されるのだという。私は学校が好きだったし、あの空間も実は気に入ってたのかもしれない。とても悲しかった。けれど、よくよく考えてみたら仮校舎でもなんでもみんなに会えること、一緒に通えることは幸せなことだと思った。同時に私はぜいたくな人間だなと思った。

家族と見ていたニュース。地震の予報やお店などの情報、流れるニュースはどれも地震関係だけど、悲惨な光景、津波の恐ろしい足跡は別物だった。この震災でたくさんの人が亡くなった。日本の犠牲は大きい。亡くなった人だけではなく、取り残された引き裂かれた人たちの悲しみも、私なんかの悲しみと比べられないほど大きい。家に帰れない人や、ろくに学校に通えない人もいるのに、私は本だって服だって買える。地震が起きた直後はこれ以上の悲しみはないってくらい辛かったけど、今は恵まれてるなと思うことができるようになった。

私が今できること。まずは募金と節電。これは私だけでなく、日本国民みんながやるべきことだと思う。私一人の力なんて非力でたかが知れているけど、全員で取り組めば、それはとてつもなく巨大な力になる。何より募金しよう、節電しようという気持ちが大切なのである。やがてその思いは被災者たちの心に伝わる。今、福島は原発や放射能の影響で疎まれているのかもしれないけど、こんな状況だからこそ人間は繋がることができる。私は福島県出身でよかったと思っている。

東日本大震災を経験して、私は助け合いの大切さを学んだ。水がない生活は楽ではなかったけれど、いろんな人が情報をくれたし、食料や水、生活用品などたくさん援助してくれた。人はどんなときでも人に優しくできるんだなと実感した。それから私はお釣りを寄付している。当たり前のことかもしれないけど、私にとっては大きな進歩だ。この地震は本当に酷いと思う。傷ついた人も泣いた人もたくさんいる。きっと後世に受け継がれていくものとなる。私は現実から逃げず、どんな出来事も受け止めなければならないと強く思う。この世界には無駄な出来事なんてないし、すごく悲しい出来事も成長するための大切な出来事なんだろう。

私はこの地震は忘れない。全て受け止め立派な大人になろうと思う。



2011.3.11 卒業式の日午後、マグニチュード9（震度6弱）の地震により校舎・体育館が損壊し使用不能となる。



2011年4～6月 地区内の公民館を仮校舎として借用。写真は公民館の体育館で、1・2年生7クラスが間仕切りをして生活。暑さと音に苦しめられた。3年3クラスは公民館本館で生活。



2011年7月～校庭に設置された仮設校舎での生活が2年間続く。2013年2月に新体育館、同年7月に新校舎が完成した。